

Essay 失われつつあるもの/こと

■失われつつある商店街。今、まさに商店街の存在が失われつつあります。昼間でも目立つほど人気がなく閑散としていて夜にはさらに暗さと不気味さが増す商店街。どのお店も営業しておらずシャッターの閉まった店が連なるそれはいわゆる「シャッター通り」と呼ばれ、がらんとしたただの巨大な廃屋として存在しているのが商店街の状況です。古くは楽市・楽座が存在していた安土・桃山時代から現代にかけて歴史ある商業形態である商店街があざ笑うかのように現代の波に飲み込まれその姿を消しかけています。それでもなお生き残り続けているのは商店街としての魅力を保っているごく一部のおかげといえるでしょう。しかし、そのごく一部でさえいつ時代の波に飲み込まれてもおかしくない世の中です。それほど今の私たちには商店街の存在というのは古いものであり常に新しいもの追い求める時代の風潮のせいでもありません。

商店街には、八百屋、肉屋、魚屋、など日常生活に必要なものを売っています。しかし、大型店の台頭により商店街に行く機会も理由も以前ほど強いものではなくなりつつあるのです。大型店に行けば商店街よりも豊富な商品を安く、一箇所で手に入れることができるワンストップショッピングの利便性に消費者はすっかり魅力を奪われてしまい、商店街に買い物に行く人といえば昔から商店街になじみのある高齢者の人たちばかりで、若者にとっては興味を引く店が少なくなじみのない商店街の存在はつまらなく近寄りたがたい場所になっているのです。もともと親近感の強いはずの商店街が高齢者と若者の埋まることのない世代のギャップから現代の商店街の存在を遠く感じさせ、あるいは、商店街のほうから遠ざかっていくかのような錯覚を感じさせます。

商店街の存在が失われつつあると同時に私たちは商店街にあった大事なことも失われつつあるような気がします。その大事なものはパソコンや

携帯電話といったデジタル媒体を通じた間接的なやり取りではなく、アナログ的ではありますが直接的に人と話し活きた情報交換の場であり、幅広い年齢層がコミュニケーションを楽しめる場です。このコミュニケーションの場というのはとても大切なもので現代のような隣に住む人間の顔さえ知らない人間関係ではなく、商店街を歩けば知らない顔がほとんどいない、何かあったら損得勘定抜きに人を支え手助けしてくれる深く暖かい人間関係を築ける場所なのです。商店街には不思議と人とのコミュニケーションを円滑に進めてくれるのです。それは、商店街特有の狭さという構造がより密着性を高めているからかもしれませし、騒がしいほど活気のある雰囲気気分が高揚するからかもしれません。とにかく、コミュニケーションを促してくれる触媒的な役割を持っているのです。コミュニケーションだけではなく、ファーストフードやファミリーレストランに象徴される味気ない大衆的な味ではなく商店街の店だからこそさせるその地域、その店独特の味もあります。しかし、経済的効率性の観点から存在意義が希薄になりがちです。商店街の存在が失われてしまうということは地域社会がなくなるということ、地域社会がなくなるということはそこに血のかよった人の魅力ある街がないということです。商店街は街づくりという観点から見た場合必要不可欠な存在であり、豊かな国民生活の前提であるのです。

私たちはもう一度商店街の存在価値を再認識する必要があるのではないのでしょうか。

*

■「失われつつあるもの」は何かと考えた時、私は最初に「個性」が頭に浮かんだ。広辞苑によると「個性」とは、他人とは違う、その個人にしかない性格や性質のことであるが、私はその「個性」が現代社会において、失われつつあると感じた。個性は、他人に自分のことを理解してもらう時に、

最も伝わりやすいものだと思う。その個性は、外見（ファッションや髪型、顔など）や趣味・考え方などで様々なことを通じて表現することができる。しかし、その「個性」が今はなくなってきたのではないだろうか。

このような「個性」が失われつつある現状を具体的な例を挙げて考えてみる。まず、外見から考えてみると、最近の若い人々はファッション雑誌を購入し、そこから情報を得てその得た情報をもとに、洋服を選ぶ人が多いため、ファッションで個性を表現する人が減ってきていると感じた。街でも、その年の流行の色や柄などに合わせている人が多く見られる。また、昔は洋服の価格が全体的に高かったため、自ら洋服を作るなど、現在に比べて安易に洋服を購入することが出来なかった。そのため、流行のものを多く取り入れにくく、個人個人の個性を生かしたファッションであった。しかし、現代の人々はファッション雑誌に掲載されているものをそのまま取り入れてしまうなど、ファッションを通じて個性を表現することが減ってきている。また、「顔」を例に挙げて考えてみると、最近日本だけでなく海外でも整形手術をして自分の顔を変える人が増えている。事故などで、顔に傷を負ってしまったなどの場合は別の話だが、今の顔よりもきれいになりたいといった欲望から整形手術を望む人が多くなってきていると私は感じている。「顔」も、自分のありのままの姿を表すひとつの立派な個性であるが、その生まれてきた時から持っている、人とは違う自分の容姿さえも変えてしまう人が増えている。

次に「考え方」を例に挙げて考えてみると、最近自分が他人にどうみられるかなど、人の目を気にして自分の意見を言えず、相手の意見に合わせてしまう人が多いと感じる。全ての人と同じ考え方をしなければならないということはなく、考え方は十人十色なので、人とは違うそれぞれの考え方があって当然だと私は考える。しかし、そのよ

うな考えを持っていても、実際いざという時に自分の意見を言える人が少ないのが現状ではないだろうか。

このように、現代社会では「個性」が失われつつあることが分かる。今は、就職が困難な時代であり、この局面は経済が不況になったことが一番の理由である。しかし、経済的な問題以外にも「個性」の欠如という問題があるのではないか。それは、雇用者側だけでなく企業側の「個性」も失われつつある。雇用者側の「個性」があれば、企業側もそのような人材を必要とするだろうし、企業側にも「個性」があれば、雇用者側も就職しようという意欲が増すと思う。さらに言えば、雇用者側と企業側が今後「個性」を発揮することができれば、経済の不況によっておこった就職難という状況下の中で、自分にとって合う就職先を見つける、ひとつの手助けになるのではないだろうか。私ものちに就職活動をすることになるので、その時までには自分の「個性」を磨きあげるようにしたい。

*

■私の育った町は何処を見ても山や田んぼが広がっていて、緑が生い茂っている。夜になれば空一面に星がたくさん見えるような、いわゆる田舎だ。春には、道に花が咲き、桜も見事に色づく。夏には、陽が落ちるまで外で遊び、川へ遊びに行ったらよく魚を見かけた。夜には、蛙の鳴き声を聞きながら寝ていた。秋には、トンボが空一面に飛び回っていたり、山がお洒落をし始める。冬には、コタツに入り家族全員で紅白歌合戦を見る。そして、商店街へ出向いて買い物をしたりした。雪が降れば、雪合戦をしたり、スキーなどもする。でも、今はこう言ったことが年々少なくなってきているように思う。昔からあるものをそのまま引き継いでいるような田舎でさえも少しずつこの光景が減ってきているようだ。

私は、四月から「東京」という都会で暮らすようになり、もうすぐ十ヶ月を迎えようとしている。しかし、十ヶ月が経とうとしているのに、まだ慣れていない。どんなに生まれ育った町が偉大なのかを思い知ったとでも言おうか……。ここは、私が住んでいた田舎とはまるで違う。山や田んぼが無い。何よりも、人の人数が多すぎる。これでは、田舎が過疎化になるのも仕方が無いように思う。また、四季の移り変わりを風景では分からなくなっているに違いない。今では、交通手段が電車やバスといった自動化された運送機関になり、道路脇に咲いている花さえも分からなくなっている。また、都会には自分が惨めになるほどの大きなビルが立ち並び星が何処にあるのかも分からない。雑音も至る所で溢れていて、鳥の鳴き声や川の流れる音も聞こえなくなっている。

田舎の子どもの間でも、テレビゲームが流行し外で遊ぶことが減り、楽しそうな子どもたちの声が聞こえなくなっている。夏には、セミの鳴き声があればほど鬱陶しく聞こえていたのに、これからはクラクションを鳴らす車の音だけが聞こえるようになるかもしれない。そして、田舎に比べてトンボも都会では姿を見せない。あれほど飛び回っていたはずなのに……。自分の子どもにわらべ歌を歌ってあげても今の日本からは子どもが想像できなくなるに違いない。商店街は、人で溢れていたはずなのに今ではショッピングモールが人で溢れている。あんなに賑わっていた商店街はほとんどが閉まっているではないか。そして、今ではメールが主流になり手紙やお正月にはかかせない年賀状も若者は書かなくなっている。そのうちに、文字を書くこともしなくなるのではないだろうか？ 家族と触れ合うことも少なくなっているように思う。休日には家族全員で出かけたり、一緒に食事を食べたりと言うことも減っている。公衆電話も今では全く見かけない。見かけることの方が珍しくなっている。それは、携帯電話

という便利な機械が発展してきたからだ。言葉もまた略されている。「気持ち悪い」を「キモイ」、「うざったい」を「うざい」などのように昔から使われていた言葉でさえも今の若者によって単純化されつつある。何年後かには、略された言葉しか知らない人も出てくるのではないだろうか？ ニュースでは、毎日のように、殺人事件が話題になっている。これは忘れてはいけない「戦争」のことを人々が忘れていないからではないだろうか？ どうしてこんなにも日本の伝統が失われているのか？ 便利なものを求めるから？ 発展し続けたいから？ 昔からあるものは古くさいから？

こんなにも多くのことが失われつつある。私たちは、失ってはいけないものをどんどん自分たちの手で奪っている。誰も教えてはくれない。気づかせてもくれない。そんなことも知らないで、これからますます日本は発展し続けるだろう。便利になり、時間を有効に過ごせるようになるが、その分失うものが多い。私たちは、日本の伝統を失いつつあるが、その多くが実は残したいものであることに手遅れになってから気付くのである。

*

■私が最近失われつつあると感じているものは「近所づきあい」である。このことは、私だけが感じていることではないと思うし、よく耳にすることである。

実家にいたころはあまり実感することはなかった。しかし、一人暮らしを始めてみて本当に実感している。隣近所の人顔が全く分からないのだ。たまにエントランスなどで会っても一言挨拶を交わす程度である。去年までの生活では近所の人に会ったら挨拶するのは当たり前でときにはおしゃべりすることもあったし、少なくとも周りにどんな人、家族が住んでいるのかは知っていた。私が家の鍵を忘れて外で待ちぼうけをくらったときに家にあげてくれたり、電話を貸してくれたたりした

こと思い出す。このようにわずかかもしれないがご近所さんとのつながりはあった。私の祖父母は田舎に住んでいるが話を聞いているとより密接な関係が築かれているようである。第一に、もらいものが多い。遊びに行くと必ずもらいものの野菜やおかしがある。次に、葬式や法事も協力して行う。江戸時代の五人組から続いていると言っていた。祖父母の家→私の実家→私の今の生活というように都心部での生活になればなるほど近所づきあいは希薄になっているようだ。では、なぜ都心部では付き合いがなくなってきているのだろうか。まず、都心に住んでいる人々は地方に住んでいる人よりもあくせくしているような気がする。心に余裕がないのか、自分を心配することに精一杯で他人に気を使っている余裕などないという感じである。そして、都心には地方には想像できないくらい様々な人が生活している。ライフスタイルや考え方も様々だ。他人には干渉されたくないという人が多いと思う。近所づきあいは面倒だと嫌がる人は多いだろう。確かに気を使うことも多いし良いことだとは一概には言えない。しかし、付き合いがなくなってもよいのだろうか。

近頃「孤独死」という言葉を耳にする。一人暮らしの老人がだれに看取られることなく亡くなることである。この一種の社会問題の原因のひとつには近所との関係があると思う。たとえお年寄りが一人で生活していたとしても、周りに住む人がほんの少しでも気にしていたらそのような悲しいことは防げるのではないだろうか。

私の実家は新潟県長岡市にあるため4年前の中越地震を経験した。幸い被害は大きくなかったが団地の半分が停電になり1週間近く電気のない生活を強いられた。停電しなかった世帯のお母さん方はそれぞれの家が大変なのにもかかわらず電気が使えず食事の用意ができない家のために炊き出しをしてくれた。小中学校の休校が続くなか、親の仕事は再開され留守番をする子供が多くなって

きたころ大きな余震が起こると残っている大人が様子を見にきてくれたり、とよくしてくれた。もし近所の付き合いがなかったら、このようにお互いにこんなに助け合えたのだろうか。つながりや信頼関係があったからこそ協力して乗り越えることができたのだと思う。関東地方でも大地震が起こるといわれているが、本当に起こったときに乗り越えることはできるのだろうか。ほとんど知らない状態の人たちと困難を乗り越えなければならないのである。4年前に経験したと同じことが今の生活で起きたらきっと太刀打ちできないと思う。その位家族だけでなく周りの人たちの存在も大切なのだ。

昔のような関係を築くことは現代の生活では難しいかもしれない。しかし、自分だけをかかわるのではなくご近所さんとの関係も大切にできる心や時間の余裕を持てたらよいと思う。付き合いは楽しいことだけではないが何かあったとき親身になってくれる人がすぐそばにいることは心強いことである。そんな小さな人間の輪が増えていけばいいと思う。

*

■失われつつあると思うものは「マナー」である。マナーとは様々な場面で使われる言葉であり、行儀・作法と訳され、規則ではないが社会の中で最低限守らなければならないものと認識されている。また、マナーには他者を気遣うという意味も含まれている。マナーの低下の原因として、小さい時に親や学校などでマナーについてきちんと教わっていない、情けないことであるが教えられる大人も少なくなってきているのではないかと考えられる。また、自分が迷惑な行為を行っているという自覚がない人が増えているからだとも考えられる。普段生活する中でマナーが低下していると感じることについてあげてみようと思う。

はじめに「喫煙マナー」について考えてみたい。

現在、日本のいたるところで禁煙が勧められている。飲食店・駅構内・大学などの施設などで喫煙ができるスペースが限られ、喫煙者は居場所を失いつつある。煙草の煙による受動喫煙を嫌う人が大勢いる他、歩き煙草による事故、ポイ捨てによる火事等、様々な弊害があるために行われるようになった。喫煙者のほとんどの人は決められた場所で煙草を吸うが、中には守らない人がいる。路上喫煙、煙草のポイ捨てなども相変わらずだ。大学内でも決められた場所があるにも関わらず、守らない人、歩き煙草をする人がいる。

次に毎日通学で利用する「電車のマナー」について考えてみたい。車内で携帯電話をかける、混雑している中でも新聞を広げて読む、飲食をする、女性が化粧をする、空いている席に荷物を置く、大声で話をする、音楽の音漏れ、床への座り込み等様々な光景を見かける。しかし、誰もが自分が迷惑行為をしているとは思っていないので始末が悪い。他人への思いやりの欠如である。このマナーの悪さは、若者だけにとどまらず、通勤時の、大人にも言えることである。

最後に、「食事のマナー」について考えてみたい。肘をついて食事をしない、口に食べ物が入っているときに話をしない、片手で食べないなどよく言われることであるが、このことすらできない人が増えている。また、大学の学食で自分がテーブルを汚したにも関わらずそのままにする、飲食したごみをきちんとゴミ箱に捨てずに教室の机の中や床に放置する人もいる。次に使う人のことを全く考えていないことの表れである。

以上、身近な三つの例をあげたが、これらのマナーの低下は周囲の人々に大変不快な思いをさせ、迷惑な行為となっている。しかし、マナーの低下による迷惑行為を注意出来ない現状がある。なぜなら迷惑行為をしている人に注意をしたら、逆切れされ、暴力をふるわれることもあるからだ。本来あってはならないことである。そのため、マナ

ーの低下がなかなか改善されない。改善するためには小さい時からマナーの大切さを学び、大人になってからも老若男女問わず、マナーについて具体的に考えることが重要になると思う。また、他人に対する思いやりについて、今一度誰もが考えていくことが大切だと思う。

*

■「民主主義」という言葉を辞書で引いてみた。すると「demos<人民>と kratia<権力>とを結合したものだ。すなわち人民が権力を所有し、権力を自ら行使する立場をいう」とある。つまりは、「国民（人民）自身が政治を行うということ」である。我が国も民主主義国家であるのは周知の事実であるが、私には「民主主義」という言葉そのものが形骸化していつてしまっている気がしてならない。民主主義は、選挙などを通して我々国民自身の手によって政治を運営する仕組みであり、近代の輝かしい遺産だと称賛されている。今後、民主主義を上回る政治システムが登場することはないとまで言われている。

しかし、実際には民主主義は様々なリスクを抱えているのである。まず一つに、選挙によって決定された我々の代表が政治を行うということである。現代においては、地域的・職業的な利害関係から、自分たちに利益をもたらしてくれそうな代表者を選ぶ傾向が強い。その結果、選出される議員も国家というより特定の利益集団の意思の代弁者となってしまい、議会は単なる利益配分場となっている。我々が代表を選ぶということは、その代表は天使にも悪魔にもなりうるのである。あのヒトラーを思い起こしてみたい。彼さえも民主的な手続きによって生み出されたのである。日本でもここ2年の間に内閣総理大臣が続けて辞任するという異例の事態が起きた。国民が意識することは少ないであろうが、我々は彼らを選ぶ代表者を自らの意思で選んでいたというこ

とを忘れてはならない。

次に問題として挙げられるのが、大衆社会における政治的無関心だ。我が国の有権者のうち、選挙に行かない人間は一体どのくらいいるのだろう。現代社会における画一的で受動的な人々は、自分自身の快楽を追求し、社会的責任を果たすことを考えていないため、政治的な関心が希薄になっているのである。民主主義とは本来、国民同士の対話や討論を重ねることにより、よりよい政治を実現していくことを目的としているため、大衆社会は政治の腐敗につながる大きな要因なのだ。さらに、無関心ならまだしも、大衆からなる大衆社会は情報操作・扇動に弱く、メディアの情報や周囲の人の考え方に流されやすいという側面をもっている。インターネットの普及により、マスメディア独自の特権性は崩れつつあるものの、依然として権力と癒着したマスメディアの影響力は強いのである。

そして、最も大きな問題として挙げられるのは、我々国民が「民主主義」の意味を誤解していることだと私は言いたい。人々は何か物事を決めるとき、「民主主義的に多数決で決めよう」などとよく言う。確かに、民主制において多数決は手続き的妥当性の側面から採用されるケースが多い。しかし、単純な多数決は衆愚政治を導く可能性を抱えているのである。民主主義の根本は、「国民同士の対話や討論を重ねる」というところにあるのに、単純な多数決は「他者の意見を切り捨て、互いの意思を互譲しあう」という、ある意味では民主主義から最もかけ離れた位置に存在する概念なのだ。多数決とは民主主義において最後に行使されるべき必要悪であるにもかかわらず、日本では多数決が最初からスローガンになっているといえるのではないであろうか。民主主義は確かに画期的な政治システムだが、それを支える我々一人一人が、不斷の努力を重ねることによってその形骸化を防がなければならないのである。

*

■私には12歳年下の妹がいる。現在彼女は小学1年生だが、とても1年生とは思えない。妹はいつも自作の歌を歌いながら踊り狂っている。風呂場からもトイレのなかからも、どこへ行ってもデタラメ歌が聞こえてくる。人が考え事をしている時も歌番組を見ているときも目の前で歌ってくるので家族のストレスにもなるほどだ。

つい先日、私が皿洗いをしている時も、彼女は私の向かい側のソファの上で歌いながら踊っていた。あまり気にしないようにしていたが、彼女の歌の歌詞を聴いて私の手が止まってしまった。

♪男と～女の～距離い～

どこで覚えたんだよ！人間界における永遠の謎を彼女は気軽に歌い上げてしまった。十の位も生きていない彼女が男女の距離を歌い上げるとは世の中が恐ろしくなる。幼稚園の頃から私や母と一緒に学園ドラマを見ていたからだろうか。しかし、こうした子どもは私の妹だけではないらしい。小学1年生のクラスではドラマが普通の会話として出されているそうだ。昼ドラを見ている子もいるという。ちなみに私が小1の頃、超がつくほど純粋で先生に怒られるとって大晦日も8時に就寝していた。最近の子どもはだいぶ大人びている。

近年では脱ゆとり教育が進められている。中学の英語の授業は英会話で授業を進めるそうだ。これからの脱ゆとり教育を受ける子どもたちは精神も学力もぐんと成長率が伸びるのだろうか。

ところが現在、米のサブプライム問題を始まりとして、リーマンブラザーズ倒産から日本の経済も崩壊している。今年11月の有効求人部率は0.76倍、4年9ヶ月ぶりの低水準にまで落ち込んだ。来春に高校や大学を卒業する学生の採用内定取り消しは769人(12月26日付)に上った。さらに派遣労働者の多くが雇用期限をいっせいに迎

える「2009年問題」もあり、09年には職のない人々が日本中にあふれ出す予定なのだ。もしまた何年も続いた就職氷河期がくれば私たちはどうなってしまうのだろう。90年代の就職氷河期に就職活動を行った人々は新卒採用の対象にならないために、現在でも日雇いや派遣労働者として生活するものがある。彼らはまたしても社会の波に飲まれようとしている。もはや私もそうした生活を送らざるおえなくなるかもしれない。

当たり前のことだが、就職活動の成功が必要だろう。学力の他にも個性や魅力が求められる。高校3年生の時、英語のテスト返しのときに「今までにない、史上最高の馬鹿」と告げられた私たちはどうなるのだろう。全国の学生が馬鹿ではないはずで、私はもう就職負け組の危機にある。どうしよう、いつまでたっても就職できなかつたら…。個人的に30歳になった頃には脱亜論を達成して米か欧州に住んでいる予定だった。そんなことを考えていたら、ふと思い出した。私が30歳の時、妹は18歳なのだ。女子的にはなんともリアルな数字である。もしも今回の雇用問題が10年越しの就職氷河期へと発展したら…。やっと経済が安定した頃、脱ゆとり教育で育てられた子どもたちが就職したら。私だったら史上最高の馬鹿より、はじめから英会話も出来て学力のある人々を採用する。

雇用問題の長期化は避けたいし、経済の建て直し早く進められればと誰もが願っているだろう。将来の夢や希望、目標を持つ学生は、景気の悪化や雇用問題が進むにつれてそれらを失いつつある。内定取り消しされた学生はもう失ってしまったかもしれない。現在私の米行き（又は欧州行き）のチケットは失われつつある。もはや世界中がゆとりなど持ってられないのだ。

今失われつつあるもの。それは夢や希望、目標といった心のゆとりではないだろうか。

*

■「失いつつあるもの」は今の世の中に数え切れないほどあるであろう。数字の上での「失われつつあるもの」はたくさんある。例をあげるならば若者の農業離れがそうだ。今では20代、30代の若者は代々受け継がれてきた農職の後を継がずに都心へと出稼ぎに行くものが後を絶たない。しかし、今40代、50代の農業を営む人々は10年後に働いていられるとは一概に言えない。我々の食卓から日本産のおいしい食べ物が消える日も近いと言えるのかもしれない。

若者の農業離れを例にとったが、こういった例は数字に表れ、かつ食卓から日本産の食べ物がなくなってしまうという「見える」危機感があると言える。しかし、自分が危惧をいんでいるものは「見えない」ものだ。「見えない」ものとは、数字に表れないものであり、自らで「感じる」ことでしか知り得ないもの。それは、「思いやりの心」である。

自分が大学生になり、社会に一步近づいたことで世間への視野が広がり、今まで知り得ぬことも体験を通して知ることができるようになった。その分、今まで知り得ぬ社会の黒い部分も知ることになったと思う。今まで自分は小中高と徒歩や自転車で通学していたため電車に長時間乗る機会がほとんどなかった。そのため、周囲の電車の中でのマナーの悪さにとても驚いた。優先席に若者が当たり前のように座る。たとえいくら疲れていても落ち着いて座ってられないというのが成人として当たり前だと思うのだが。お年寄りが席を必死に確保する姿が目立つ。そうさせてしまっている自分たちが恥ずかしい。また、優先席付近で携帯電話を当たり前のように使用する。もし、自分がペースメーカーのような機器を心臓に取り付けていたならば不安でしょうがない。こういった電車の例だけでも「思いやりの心」の欠如がたくさんある。

人は自分が強い親しみを感じる人たちに対して

「想う」ことができる。好きになった人や家族に対しての愛情が生まれる。「想う」ことのできる範囲は小規模かもしれない。けれど、その「想う」範囲を少しだけ広げれば周囲に対する「思いやり」になるのではないだろうか。しかし、我々は家族や友人といった大切な人にさえ「思いやりの心」を持っていないのではないかと心配になる。何不自由な生活を19年間もの長い期間自分に与えてくれた家族、日々楽しませてくれる友人、様々なことを教えてくれる先生。当たり前に対して感謝を忘れていないのではないだろうか。学校へ行き学べること、友人と遊べること、ご飯を食べられること、生きているということ。感謝の域は広大だ。その一つ一つに感謝を忘れてはいけない。毎日の当たり前に感謝することは自分の大切な人たちを「想う」ことに繋がる。自分の大切な人たちを本当に「想う」ことができたならば、その矛先を周囲に少し向けることができるのではないだろうか。周囲に対して不快な思いをすることが多い今日では、世間の人々は自分の大切な人たちを「想う」ことがあまりできていないのではないだろうか。一人一人の感謝の気持ちが周囲を変えていくだろう。また、人を「思いやる」ことができたならば、それは必ず自分へ返ってくる。「思いやりの心」は大人への第一歩であり、死ぬまで続けるべきものだ。人が生きていく上で「思いやりの心」は失われては絶対にいけないものなのだ。

人間ならば楽しい時、嬉しい時、悲しい時、苦しい時、寂しい時など様々な感情が生まれる。どんな状況下であっても「思いやりの心」を忘れず、たくさんの人たちから「想われる」人間になりたい。

*

■電車の中、携帯電話で話す人、地面に座り込む人、混雑時に足を投げ出している人など電車内のマナー違反が最近よく目につく。マナー違反を

防止するような広告が増加したような気もする。他にもゴミや煙草のポイ捨てなど本来なら当然守られるべきマナーが日常的に破られているのが現実だ。また、私自身も含めマナー違反をしている人がいても注意などはせず見過ごしてしまう人がほとんどだと思う。マナー違反をしてしまう理由としてはよくモラルの欠如が挙げられるが、では一体モラルの欠如とはどういうことなのだろうか。

モラルとは社会の構成員が相互間の行為の善悪を判断する基準として一般的に承認された規範の総体のことを言う。（『広辞苑』より）そのモラルが欠如しているということは社会で考えられている善悪と自らが考えている善悪がずれているということになるのではないか。そのモラルが何かのきっかけでずれたため今の状況を生んだのだ。しかし、ではなぜずれが生まれてしまったのだろうか。日本人は普通周囲の人々からの目というものを気にして、周囲の人々から完全に浮いてしまうような目立った行動はとりたがらないものだ。特にその行為が自分でも後ろめたいと思うような行為の時は尚更だ。しかし、誰か一人モラルの保たれた輪を乱す人が現れると例え悪い方向だったとしても途端にその方向へ流れてしまう人々が現れるのだ。日本人の周囲の人々と協調、調和しているという良い部分が悪い傾向つまり考え方のずれを生んでしまったのだ。

モラルの欠如というのはたいてい若者に対して使われることが多い。それは若者が大人に比べて時代の流れに影響されやすいからだ。若者は悪いことにも良いことにも影響されて最終的に成長する時期である。その時期には悪い方向に流された若者を正しい流れへと戻すために自分達の行為は間違っているとってくれる人が必要だ。その人が必ず大人である必要はなく、若者同士で気付け合えることができるならばとても良いことだと思う。しかし、若者が道を踏み外した時に軌道を修正してくれる大人は必ず必要になってくるはずだ。

だからこそ最近の若者はモラルが欠如していると言っただけ批判し見捨てるのではなく、大人も関係する問題として共に今後どうすべきなのか考えお互いが理解し合う努力が必要なのである。

モラルというものは本来ならば守るべき規範ではなく当然守られていることが前提の規範の総体であり、人々が生活している上で自然と発生したものだ。そのモラルが今となっては守るべき規範へと変化している。この変化を私たちはどのように捉えていくべきなのであろうか。モラルが失われつつあるということは目に見えてははっきりとわかるものではなく、実際私がマナーなど気にかけるようになったためにモラルの低下を感じただけかもしれない。しかし、このモラルの意味合いの変化こそがモラルというものが失われつつあるという証拠することはできないだろうか。

*

■21世紀は恐ろしい世の中である。と、最近つくづく感じる。資本主義である社会を土台として、その上には欲望や競争が溢れんばかりに増え続けている。テレビをつけてみると、脱税、強盗から痴漢までありとあらゆる人間の汚い部分から関係した事件が嫌でも目にはいつてくる。

このように欲望の赴くままに行動している人間を見ていると、現代人は自律の念を失いつつあると考えずにはいられない。

さてそこで、人が自律の念をもっていた頃はいつだろうか。私は、日本がまだ厳しい法律に縛られ、貧しく経済的効果もあげていない時代を想像した。もちろん、実際にその時代を生きたわけではないので正確な真偽の程はわからない。しかし、貧しかった当時人間は不幸だったのであろうか。古人の残した画像や映像をみてもわかるとおり、そのようなことは決してないと思う。定められた法律の中でいかに物事に対処して充実した生活を送るか、またいかに自分を成長させるか考えたに

違いない。当時の人々は、法律という括りの中で自分を律していたのだ。

一方現在の日本はどうだろう。我々は裕福になり、望んだものはなんでも手に入れることのできる何不自由のない世の中で暮らしている。日本という国はとても生きやすく、自由な国になった。表面的に見れば大成功である。しかし、そんな金ぴかの世界の間からいつまでも満たされることのない貪欲な私たちの心を見つけることは容易である。

昔と今、二つの時代の間にはどのような相違があるのか考えてみよう。一つの答えとして、法律の厳しさが関係しているだろう。絶対的な決められた枠があれば、その中で自分を変えていく方法はいくらでもある。一方、自由に動けるようになった今、私たちを縛るものはずいぶん少なくなった。これによって日本は様々な分野での発見と充実を図りながら生活することが可能になった。しかし、だからといって心に満足を抱けるかどうかは別問題である。個人個人がこのまま好きなことばかりしているといずれ有難みのわからない心や冷たい心が渦をまく、灰色の世の中になっていくだろう。

欲望というのは限りなく増え続けるものだ。これは人間の性質であるから仕方がない。しかし、このままでは終わらせないという改善の心もまた、人間の性質である。今の私たちに必要なことは、自分で自分の中の規範をつくるということではないか。あるいは、自分に適する規範に身を置くのもひとつの手段である。そう、つまりは自律の心を常に持つということだ。人は集団の中に入りたがるが、これは規範のある状況で生きる方法の一つだ。例えば身近なところにも、宗教団体の一員になることや、部活という場での活動など、決められた範囲の中で自分を育てていくことが可能である。

昭和、鈴木内閣の下で財政政策に取り組んだ土

光敏夫さんは言った。「楽をして本当の文化はできない」と。人は苦しい状況や定められた環境の中で自分を律し、その努力によって自分を成長させることができるということだろう。私にも思い当たる節がある。五年も前のことであるが、ある先生の「悩んだときはより苦しい道を選びなさい。きっと後悔しないから」という言葉が心に残り、辛いことからすぐ逃げようと思ってしまいがち。私は度々この言葉を思い出して自分を律するのだ。それからは悩むことがあってもやり遂げた後で後悔したことは一度もない。

人の欲望は限りない。自由な世の中である今こそ、現代人はもっと自分の中での美学というものをもち、自分で自分を律する心を持ち続けることが大切である。そうすればきっとその中でいかに自分が幸福になれるか試行錯誤し、新たな文化を築いていけるに違いない。

*

■私たちの生きるこの時代は、便利なものであふれています。水は水道から制限なく流れ、電気のおかげで夜間も関係なく作業ができる。情報はテレビが常に伝えてくれる。街にはコンビニがあふれ、この国で食べ物に困ることはほとんどないと言えます。しかし、それらと引き換えに失われつつあるものも数多くあるはず。今考えられるのは、森林や、サンゴ礁などの自然の減少、温暖化による氷山、オゾン層の破壊、また、より身近な生活からみると、手間をかけて料理をする機会や、手書きで手紙を書くことなど…。

その中でも、私が最近失われつつあると感じるのは『人との関わり』です。当然、人間は決してひとりで生きていけるわけではなく、他人との集合体で生活しています。しかし、他人を思いやりといった人と関わることのベース部分を失いつつあると思います。また特に 2008 年は、無差別殺傷事件が多かった気がします。事件を起こした犯人

が口をそろえていうことが、「誰でもよかった。むしゃくしゃしていた。」という供述。他人のことを一切考えず、あまりに自己中心的で、身勝手な行動です。その根本的な原因には、人との関わりが薄く、人との接し方が分からない、人を思いやれない。といった現代人の在り方があるような気がします。殺人のような凶悪犯罪でなくても、身近なところで思いやりの欠如を垣間見ることがあります。それは、バスや電車の優先席。若い人が堂々と座席に座っている姿を見るのは少なくありません。自分さえよければそれでいいのでしょうか。また、私の祖父の家は、新潟県の片田舎にありますが、そこでは、一昔前の近所付き合いが続いており、人と人が深く関わっています。誰もが、くだものやお茶菓子を持って「どうもどうも」と気軽に家を訪ねてきます。それは無論、義務的に行われるのではなく、人との関わりを大切にする、そういった気持ちからくるものです。ところが、最近は隣の家に住む住人の名前さえ分からない、ということは珍しくありません。実際、私もお隣さんの名前を知らないのです。

生活形式が変化していくにつれ、人々は忙しくなり、自分のことで精一杯になってしまっているのかもしれない。なるべく他人と接する機会をさげ、めんどろなことは減らす。確かに、そうしていれば楽だし、ひとりになりたいときは誰にでもあると思います。しかし、困ったとき、つらいときこそ、誰かに相談に乗ってもらわなければならないのは、とても悲しいことです。生きていく上で、人との関わりが完全に失われることはありません。いつの時代でも人は人と関わりあって生きています。しかし、その形態は確実に変化し、薄れ、また失われつつあります。今後、世界中でアメリカの不況の影響がさらに増していくことで、職を失う人も、家を失う人も数多く出てくるのが懸念されます。しかし、我々はそんな時

代だからこそ、自分中心でものを考えるのではなく、他人を思いやることの大切さ、人との関わりの大切さを見直すべきでしょう。

*

■「失われつつあること/もの」という課題を出された時、自然・家族・コミュニケーション能力といったテーマが浮かびました。思い浮かんだテーマを分析してみると、「マナー」という言葉が、いずれのテーマにも共通して見られました。しかし、「マナー」というあいまいな基準を持ち、外来語ながら日本人の意識に深く根付き、その低下が危惧されているものは一体何なのかを書いてみたいと思いました。

この「マナー」という言葉を国語辞典で引いてみると「行儀」、「作法」、「礼儀」という意味が載っています。日々の中では、この言葉は、冠婚葬祭、ビジネス、手紙という言葉とともに使われ、「マナーの低下」となると電車・バス、路上喫煙、ゴミの分別という言葉とともに使われています。確かに、電車内での通話・優先席を譲らない・たばこのポイ捨て・ゴミの不法投棄・公共物への落書き・違法駐車など多く見られます。加えて、礼儀正しく、マナーを守ると考えられていた日本人が、世界遺産に落書きをして、謝罪に行くというニュースもあり、外国からの日本のイメージもあまり良いものではありません。

しかし、このような行為はマナーとして間違っているのではなく、常識として間違っているというのが私の考えです。常識は生活をしていく上で当たり前のことであり、自然とあるものである。マナーは守るべき、守るように心掛けるものという区別でき、常識は土台のようなもので、マナーはその上に作られるものだと私は感じます。常識とマナーの意味を混同し、常識であることをマナーとして扱い、自分が気に入らないものや迷惑に感じるものなどに過剰に反応した人々が、無用な

ものを含めて、全てマナーとして扱うといった要因が、守らなければならないこともむやみに増やし、それに比例して、最低限守らなければならないことも増えてしまったように感じます。そのために、最低限守らなくてはならないラインがわからなくなっているために、そのラインを守らない人が増加し、マナーの低下という事態が発生しているのだと思います。

マナーの低下は若者の態度が悪い、注意を聞こうとしないことが原因だといわれています。しかし、若者だけではなく、大人や年配の人全般にも見られます。子は親を映す鏡というように、教える立場である大人も子どもたちが自分の行動や振る舞いをまねて育つことを改めて見直すことで、子供だけでなく社会全体のマナーが向上するのだと考えます。

英語のことわざに“Manners makes man.”（礼節が人を作る）というものがあります。当然のことながら常識を持っていることを大前提として、マナーを守ることで社会的な人となるのだと私はこの言葉から感じます。周りの人もそうしているから自分もそうするのではなく、自らで判断し、自分が最低限のマナーを守り、その価値観を他者に押し付けるのではなく、自分自身が模範となるべき行為を行う。決してすぐに効果の出るものではありませんが、自分自身が行動を起こしていくしかないとは私は考えています。
